

理事長挨拶

東京埼玉大会に向けて

日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会理事長 長谷川 幹



新型コロナウイルスが世界規模で拡散し、日本でも第2波が収束せず、まもなく冬を迎える第3波への対応が各地で求められます。この状況下で障害のある人、高齢者の生活はどうなっているのでしょうか。筆者が訪問している障害のある人、高齢者は、日常生活がほとんど変わらない、通所などを含めた外出の機会が少なくなる、あるいは外出しない、にわかれます。障害のない人が従来の日常生活から新しい生活を模索する状況と比較して、日常生活が変わらないですむ障害のある人の現実に衝撃を受けました。

このような状況の中、2020年6月予定であった全国大会の三重大会は中止となり、2021年度は東京埼玉大会として友井規幸氏が大会長となり実行委員会が準備を進めています。まだ仮の段階ですが、コロナ禍で新たな生活を模索する中で脳損傷の人がオンラインで参加するにはどうすればいいか、大会は対面とZoomの両方ではどうすればいいかなどを話題に挙がっており、障害のある人の新しい生活様式について模索しています。

皆さまのさまざまな知恵をお寄せいただき、2021年度の全国大会を契機にしてこの苦難な状況から新たな生活をより良いものに創っていききたいものです。

新副理事就任の挨拶

■長田乾さん（横浜総合病院 臨床研究センター）



この度、脳損傷者ケアリングコミュニティ学会の副理事長を拝命しました長田乾（ながたけん）です。私は神経内科の臨床医で、認知症、高次脳機能障害、脳卒中などの患者さんを診察する機会が多いことから、長谷川理事長から誘われて、当学会の創立当時から実行委員・理事として参加させていただいております。2012年には第2回脳損傷者ケアリングコミュニティ学会を開催させていただきました。脳損傷者ケアリングコミュニティ学会は、当事者と介護者、さらに医療・介護・福祉関係者が双方向で情報を交換・共有するという大変ユニークな発想のもとに組織されたコミュニティで、今後さまざまな観点から「共生」を目指す社会においてその存在感を増すと考えております。長谷川理事長を支えて、敷居が低く裾野の広い学会を目指して頑張ります。

■友井規幸さん（NPO 法人日本失語症協議会）



新任副理事になりました友井規幸です。約20年前、脳梗塞を発症して倒れ、入院しました。治療やリハビリを受けましたが、後遺症で右半身麻痺と失語症が残りました。もう死にたいと思った事は数えきれないくらいありました。しかし、家族や同僚、友人などに励まされて、元の会社に復職しています。今回、ケアコミ学会の副理事長を拝命することになりました。一生懸命、頑張りますので、よろしくお願いいたします。また、今年コロナの影響で、三重での全国大会が中止になりましたが、来年度は東京や埼玉で全国大会を開催いたします。そこで、大会長を務める事になりました。みなさん、ぜひ、ご協力をお願いいたします。

■細田満和子さん（星槎大学）



障がいの有無に拘らず、そして性別、人種・民族、年齢、社会的地位などの違いを超えて、誰もが人として尊重され、共に生きることが可能な社会はどうしたら可能か、ということを考えています。普段は大学で社会学や公衆衛生学などを教えています。

感銘を受けた脳卒中サバイバーの方からの言葉。「こうなって、失くすものもあるかもしれないけれど、そんなになくしちゃいけないと思った。マイナスになった分は、どこかからプラスになるのよ。いつでも満タンになるものなのよ。」

ケアコミには、こんな風に考えていらっしゃる方がたくさんいて、共に活動する中で、いろいろ教えて頂いています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

※ 就労に向けて利用できる機関はいくつかあります。そのどの機関を利用されるのがその方の状況にあっているのかは各地にある高次脳機能障害支援センターにご相談されるのが良いと思います。

「高次脳機能障害に特化した就労支援～支援者の立場から～」

一般社団法人クリエイティブ・ソーシャルワーカーズ・ジャパン「就労移行支援レジリエンス」は、2016年10月1日に東京都から指定認可を受け、高次脳機能障害の方の就労支援に特化した就労移行支援事業所として開所しました。また、2020年9月1日からは就労定着支援事業の指定認可も受けました。

非常に多様な症状のある高次脳機能障害を持つ方の就労支援を進める上で、大事にしていることは、利用者のニーズを丁寧に聞き取った上で、それぞれの特性や症状、現在の状態に合わせた個別対応で、それぞれの利用者さんに特化した「強みを伸ばす支援」を行うことです。また、「本人が好きなことや興味のあることをベースにした方が、脳の回復につながる」という考えに共感し、パソコンや脳リハ、言語リハ、各種学習、ワークショップや音楽療法など約50種類のワークから利用者本人に、毎月希望するワークを選んでもらい、その月のワークプログラムを作成しています。登録利用者が2020年9月現在、26名ですので、月間のワークプログラムが26通り存在します。

高次脳機能障害をもつ方のできなくなった部分に着目するのではなく、それぞれの長所、希望、持っている様々な資源を生かして、自らが課題や問題に取り組む力「ストレングス」を伸ばし、逆境からの回復力、復元力「レジリエンス」を高め、それによって自分らしく働ける仕事をし、生活や趣味を楽しめるようになる為に、当事業所では「ストレングスモデル」「レジリエンス」の考え方を基本に、ご本人主体の支援をしています。

一般社団法人クリエイティブ・ソーシャルワーカーズ・ジャパン
就労移行支援レジリエンス 代表 蟹江幸二

参考文献：G, シェパード著「ケンブリッジ・リカバリーセミナー資料」2011/8/9

就労するということ① 「私の軌跡」



根本 佳奈

所属；初台リハビリテーション病院 サポート部

発症；2010年 低酸素脳症

主症状；記憶障害

私は、21歳の時に起こした痙攣重責発作によって高次脳機能障害になった社会人歴3年目の者です。

私は、今まで通所していた施設で職場体験をさせて頂き、働く環境や人間関係などを勉強させて頂きましたが、その後、家族会賛助会員の医療ソーシャルワーカーの方の紹介で現在の仕事に就きました。今の職場は、環境・人間関係などが私にとってとても恵まれています。

まず初めに、私の普段行っている業務内容をご説明したいと思います。

私が行っている仕事は、社員の方の普段手が届かない業務（書類整理やシュレッターなど）をやらせて頂いています。そのような仕事でも度々スタッフの方に「ありがとう！」と言葉や態度で示されたりして、それが私にとって物凄く嬉しく、モチベーションアップに繋がっています。また、とても幸せなことに上司や周囲の方々の温かいサポートもあり、日々無事に仕事を熟しています。

私の障害特性の中に「健忘症」があるのですが、その対応策としてポストイットとペンは、必ず持つようにしています。時間管理の為に携帯も必需品です。また、仕事をするうえでも 友人関係でも一番大切な事は、「自身の障害について自分自身どれくらい理解していて、それについての対応策を講じられるか」だと思っています。

毎日の地道な作業の繰り返しが大きな成果となっていずれ自分に返ってきます。

まだまだ駆け出しの未熟者ですが、これから色々な経験を積み重ねて行きたいと思っています。

これからの方々、大事な何事にも挑戦するチャレンジャー精神だと私は思います。

就労すること②「感謝の気持ち」



佐藤 利彰

所属；株式会社ゼンショービジネスサービス

発症；2009年 低酸素脳症

主症状；記憶、歩行、書字困難

私は、元の会社に復職が叶いませんでしたが、就労したいと思っていましたので、まず障害者就労支援センター「げんき品川」に相談しました。そこで就労訓練と就労移行支援のサービスを受けた後、大田福祉工場の就労継続支援B型で3年程働きました。その後、大田福祉工場の就労移行支援から今働いているゼンショーに体験実習に行きました。会社の方にここで働きたいですかと言われて入社しました。もうこの会社で働いて5年になります。

就労して気づいたことは、就労はゴールではなかったということです。就労し続けることが大切なのだと思います。そのために自分自身が努力している事としては、一人では仕事というのは出来ないの、仲間とのコミュニケーションを大切にしています。具体的には感謝の言葉を心掛けています。そういう心掛けで仲間とも上手く仕事が出来て、とても働きやすくなっていると思います。

これから働きたいと思っている方に伝えたいことは、自分に出来ることと、出来ないこと、苦手なことを把握することです。また、出来ないことを人をお願いする勇気を持つことも大切です。そしてやはり感謝の気持ちをいつでも持つことはとても大切だと思っています。

就労すること③「自身を信じて」



荒井 隆浩

所属；社会福祉法人 東京コロニー 東京都大田福祉工場 製造部制作課 DTP

発症；2010年 交通事故

主症状；社会的行動障害、地誌的失見、記憶

2010年に交通事故で高次脳機能障害になりました。当時は思い通りに行かない自分に常にイライラして、怒る理由を探す為に外出してる様で、家に居る時は親に当たり散らしてました。実家の壁にう穴だらけにして....

ある時、母親の悲しそうな背中見て思ったんです。「このままだと自分も親も取り返しつかなくなるな」って。それで反対押し切って独り暮らし始めたんです。無理は承知で。そしたら当たり前ですけど全部自分の責任なんですね。八つ当たりする相手なんて居ないし怒ってる暇なんかない。何より世間と渡り合って生活費稼がなきゃいけない。って就労移行に通い出しました。世間と交わる為に家族会だったり集まりに顔出す様にもして。

外に出て人と交流する事で少しずつ心が溶け始めて、高次脳としての新しい自分が形成されて行く。どうせならこれを機会に自分が思う正しい人間に成ろうと思って。そうしたらケアコミの東京大会で話す機会くれたり、それを観てウチで働く？って声かけてくれる人も出てきて。元々デザインの学校出てたのもあって、鶴田さん(次記登場)に「ウチくれば？」って言われて福祉工場に就職したんです。大田福祉工場は障害者と健常者が一緒に働く印刷会社で、僕はPCで印刷物のデータ作るDTPのオペレーターやってます。福祉の施設に入れば安泰だと思ってましたけど、組織に入れば人間関係も出てくる。僕、福祉工場のA型で働く初の高次脳ですから、A型で高次脳の事理解してる人はほぼ居ないです。障害者って案外自分以外の障害の事は知りませんし。就職のゴールはしましたけど、実際は入ってからが就労のスタートだと実感してます。

僕は『一人暮らし』って方法がうまく行きましたけど、実際、人って追い詰められた時に「火事場の」じゃないですけど根本に持ってる本気の力を出す。ってのは有ると思います。

人の事とか周りの眼は一旦置いて、自分の心と素直に向き合って、誰でもない自分にだけは嘘をつかず行動して、迷った時はその自分の心に聞けば障害者でも健常者でも人として正しい事は変わらないはずですから。

因果応報。見てる人は見てくれますから、大丈夫。そう思います。

「こんな就労支援者になりたい」



就労支援にかかわってきて、なかには高次脳機能障害の人もありました。高次脳に限らない話ですが、大切なのはトレーニングよりもマッチング。支援者に求められるのは、その当事者がいま出来ることを見極めること。（できれば、これからの伸びしろと伸びるまでに何が必要なのか（時間と協力）も考えたいですが。）そして、その人がいまの状態で働くことが可能な場所を見つけることです。もちろん、本人が、いつ・どんな所で・どんな風に働きたいか、という話とのマッチングでもあります。本人の希望と現実の間で、気持ちに寄り添いながら働ける場所をいっしょに探すことになります。就労支援機関は、ともすれば企業の希望にそって本人の力を伸ばすことに注力しがちですが「このような配慮があれば、その人は働けるし、企業にもプラスになる」ということを企業に提案する力も就労支援者には求められます。そこでカギになるのは実際の現場での実習。就労の前に実習をはさむことは、本人にも企業にも大切だということを両者に理解してもらうことも大切です。就労の時間も短い時間から始めて調整できることが両者のプラスになるはず。

ここまで書いたのは、前提として就労したいと思っている人の話です。あきらめている、あるいは、あきらめさせられている人も少なくありません。そういう人に対しては、あきらめている今の気持ちをゆっくり聞き、本人が持っている力に本人が気がつくプロセスを、あせらず時間をかけてつくることが大切。先日『「脳コワさん」支援ガイド』という本を読みました。当事者による従来なかった支援ガイドでした。支援に関わる人には「^{アストリッド}必読」と言えるかもしれない、と思ったのでした。

大田区高次脳機能障害支援者ネット 代表
社会福祉法人 東京コロニー 東京都大田福祉工場 鶴田 雅英

ステイ・ホームどうしました？

思いがけず長期となったステイ・ホーム期間について3名の方からの近況報告を頂きました。

とても調子が悪くなって仕事も休みました。何故かは自分でもわからなかったんですが、医者に言われて納得しました。コロナが一般人に与える心理的ダメージは大きい。高次脳であれば尚更。

高次脳で作り上げて来た生活がコロナの進出で、マスクやソーシャルディスタンスが加わった。家族会、当事者会もなし。皆の顔も見れない。高次脳になって新しく作り上げた生活のルーティンがコロナに崩されてる。でも、高次脳の人だけじゃないのがポイントで。皆もだから尚更気付きにくい。納得でした。まだ気付いていない当事者も多いと思います。

(東京都・Aさん)

私は12年前、脳出血を発症し左片麻痺になりました。

2年前、大腿骨骨折で手術～3ヶ月間のリハビリ入院を得て杖歩行が可能となりました。コロナ禍前は、週3～4日2時間ほど公共のジムに通い筋トレに励んでいましたが、非常事態宣言後は、Stay homeを余儀なくされ、日を迫うごとに家にいる事が苦にならないことに危機感を抱き、そんな時に逢ったのがリモートのナイトストレッチでした。リモートなので、健常者を意識すること無く自分のペースで楽しめる事が嬉しく朝までぐっすり質のよい睡眠が魅力です。

(神奈川県・押田ひとみさん)

脳卒中者にとっては、日常の身体を伴う障害とともに患者であり、病院との関係は深い。コロナ感染により、医療機関のクラスター発生による閉鎖は本当に厳しいものがあつた。

コロボックルは、高次脳障害の当事者・家族の支援を1999年から行っています。新型コロナウイルス感染対策による環境変化は、当事者の心身に悪影響を与え、支える家族も不安にさせると考えられ、安全の範囲で活動を続けてきました。コロボックルが変わらず動いていることに安心したとの声を頂き励みとし活動しています。

(札幌市・『コロボックル相談室』尾崎 聖さん)

編集後記

去年の今頃は誰がこのような状況を予想したでしょうか。東京オリンピック、パラリンピックの開催を選手も応援者も楽しみにしていたことが、「新しい生活様式」を迫られる状況となりました。「自粛生活」という制約を乗り越えて、私たちはそれぞれに「新しい生活」を見つけています。病気や事故によってそれまでの生活を一変せざるを得なくなった障害のある人にとって感染予防による新しい生活は、更なる挑戦だったかと思います。来年の全国大会では、そんな新しい力を発揮できる大会にしたいと思います。皆様の参加をお待ちいたします。

- 中島 鈴美 -